様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １２ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０６５６

研究課題名（和文）幕末・明治初年の農業構造と地域社会－羽州村山郡における再検討－

研究課題名（英文）Agricultural Structures and Regional Societies at the End of the Tokugawa Shogunate and Early Meiji Period: A Re-Examination of Ushu Murayama County

研究代表者
岩田　浩太郎（IWATA, Kotaro）

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：３０１８４８８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,400,000円、（間接経費）　1,020,000円

研究成果の概要（和文）：　幕末・明治初年の山形県村山地方における地域社会の変動及び統合過程を、幕府代官所及び山形県と地域社会の諸階層（大規模豪農、中小豪農、自作農、小作農、日雇雑業）の複雑な対抗と連携の過程として総合的に分析した。
　特に、著名な「世直し状況」論では注目されていなかった「大規模借地農」（大規模な小作経営）が層として存在していたことをあきらかにした。彼らは幕末期の広域的な小作争議を主導したとともに商品生産を組織し、明治期になると、彼らは組合村惣代ではなく、山形県に地域産業振興を献策した大規模な豪農とそれと連携する中小豪農を支持したため、彼ら豪農層による地域統合が全体として進展したことをあきらかにした。

研究成果の概要（英文）：In this paper, we comprehensively analyzed regional social change and the integration process in the Murayama region of Yamagata Prefecture at the end of the Tokugawa Shogunate and early Meiji period as a process of complicated opposition and coordination between the local governor of the Shogunate and various prefectural and regional social classes.
We clarified the existence as a class of large-scale tenant farmers and who were not addressed in the prominent situational theory of world reform. We elucidated that these farmers were not village association representatives, and that they led widespread tenant farming disputes and organized commodity production at the end of the Tokugawa Shogunate. In the Meiji period, they supported large-scale wealthy farmers who proposed regional industry development to Yamagata Prefecture and collaborating small–medium scale wealthy farmers. For this reason, regional integration by the wealthy farming class progressed as a whole.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、日本史

キーワード：日本史　経済史　農業史　豪農　小作人　地域統合　政治過程　地主

１．研究開始当初の背景

（1）日本近世史及び明治維新史研究においては、「世直し状況」論における社会経済構造分析と「地域運営体制」論における政治過程分析とが乖離したまま、近年の豪農論・地域社会論が展開している学界状況があり、その状況の打開が学界の課題となっていた。

（2）「世直し状況」論の論証フィールドの一つである出羽国村山郡（山形県村山地方）を素材に、同論の社会経済構造分析とくに豪農－半プロレタリアという階層構造分析を修正ないし克服しうる可能性を得つつあった。

（3）本研究代表者は、出羽国村山郡の大規模豪農とそれと矛盾対抗関係を内包しながらも連携した中小豪農（以下、この関係を大規模豪農－中小豪農と表現する）の政治経済社会活動の検討をおこない、地域社会の近代化に向けたヘゲモニーの所在と社会的矛盾の展開につき、豪農論の観点から研究を蓄積していた（「豪農経営と地域編成」『歴史学研究』第７５５号ほか）。

２．研究の目的

（1）近世後期～明治初年の日本の地域社会における政治経済社会変動を総合的に把握する研究方法を開拓することを、一地域の事例分析を素材に、実証的に試みる。

（2）特定の地域社会に関する社会経済構造分析と政治過程分析を有機的に統一させることが、豪農論・地域社会論の現在的課題である。この点の研究の前進をはかる。

３．研究の方法

（1）山形県村山地方では、地租改正事業において地価算定のために立附米調査が実施された時期がある。その際に作成された「田畑立附米地主名前其外取調書上帳」「田畑立附米小作名前其外取調書上帳」の史料批判及び活用方法を検討し、明治初年の同地方の階層構造を精緻に復元する。

（2）上記の検討を通じて得た階層構造と小作人諸階層（大規模借地農・自小作農・零細小作＝日雇雑業者）の存在形態や農業経営の検討をおこない、幕末・明治初年における地域社会の生産の実質的な推進及び組織主体について検証をおこなう。

（3）上記の検討を通じて得た生産の実質的な推進及び組織主体が、領主ないし山形県、あるいは大規模豪農－中小豪農に対して、いかなる関係を取り結び、この地域社会における政治経済社会変動に関わったのか、を考察する。

（4）これらの検討を通じて、幕末・明治初年の政治経済社会変動について、豪農諸階層や小作人層など多様な階層の対立と連携、領主や県など政治権力との関係、などの複眼的な視点から総合的に考察する。

４．研究成果

（1）古文書調査により、山形県村山地方に残る「田畑立附米地主名前其外取調書上帳」「田畑立附米小作名前其外取調書上帳」を発掘した。そのための調査を山形県・東京都などで実施した。両帳面の作成過程に関する史料的考察をおこない、史料批判のうえ、両帳面を合わせて分析し、諸階層（豪農、自作農、小作農、日雇雑業など）の土地保有・地主小作関係の状況を居村・他村にわたって総合的に把握することができた。

（2）その結果、「世直し状況」論における豪農－半プロレタリア分解論では把握されず注目されていなかった「大規模借地農」（大きな小作経営）が戸数のうち一定数を占め一つの階層を構成している村が村山地方では見られた。同地方の内部では偏差もみられるが、生産力の高い谷地郷などの地域では顕著に検証できた。その結果、同地方を豪農－半プロ分解の論証フィールドの一つとする「世直し状況」論の根拠に変更を迫る結果を得ることができた。

（3）また、従来の基礎構造分析の見直しの課題に関わり、村山地方の特産物であった紅花の生産・流通の特質に関する理解を深め、その生産・流通・市場条件が大規模豪農や巨大紅花商人の成長に象徴される激しい階層分解にいかに結びつくのかをより精緻にあきらかにすることに努めた。全国紅花市場の変動と最上紅花・仙台紅花の地位変化、大規模豪農の地主手作における紅花栽培法とくに換地法の実践、巨大紅花商人や大規模豪農における干花（紅餅）の集荷法とくに選び買いや為替取組など相場変動が激しい商品である紅花のリスクを回避する手法の導入・実践、巨大紅花商人や大規模豪農の奥羽にまたがる広域的な紅花集荷網の構築、幕末期江戸打越紅花荷物一件における奥羽の紅花商人の連携と政治工作、上方の紅花市場における販売戦略と帰り荷仕入れの資金回転など遠隔地取引の商業金融的条件など、農法及び商法を含めた広い意味での紅花の生産・流通・市場条件・経済構造の検討をおこない、これらが大規模豪農や巨大紅花商人及び大規模借地農の成長の背景となったことをあきらかにした。これらの検討のために、山形県・宮城県・神奈川県・京都府・鳥取県などで史料調査を実施した。

（4）析出できた大規模借地農の存在形態及び経営内容を諸史料から検討した。彼らは比較的大きな自作をおこなうとともに、複数の他村地主から小作地を借り、一部は又小作に出したりもするが、基本は家族及び分家による労働力で大規模な小作経営を展開していた。彼らは、米作とともに畑作で諸商品作物を栽培し、紅花から生糸への転換にも積極的に対応する商業的農業を展開していた。彼らの生産量は居村全体の約半数にのぼり、地域社会の生産の実質的な推進及び組織主体となっていたことを検証した。また、明治初年の壬申戸籍や職業調査の検討をあわせることで、規模偏差がみられる小作人諸層の職業

実態と家族形態、家族内での労働の役割分担、雇用労働の有無に関する検討も進めることができた。小作下層とくに零細小作＝日雇雑業層になればなるほど農業経営における女性の役割の高さがみられる傾向も把握できた。

（5）大規模借地農の政治社会的位置につき諸史料から考察すると、大規模豪農の地主経営を支える小作支配人として小作地及び小作人管理を請け負う一方で、天保期以降の村を越えた広域的な小作争議（「均し毛見」を要求する立附米引き下げ運動）の主導者として立ち現れ、自小作層や半プロ層と連携して運動を組織した者がいたことが明らかとなった。大規模豪農にとって大規模借地農は「諸刃の剣」であり、当該期の地域社会動向においていわばキー・マンの位置にあった。大規模借地農に関するこれらの史料調査は、現在残る当該家と信頼関係を形成し、聞き取り及び古文書の撮影、解読分析、成果のご報告といった一連の活動により果たされた。かつて豪農であった旧家とは異なり小作人であった家の場合、自家の歴史に関する理解が進んでいない場合があり、調査へのご協力を得るには時間がかかったケースがあったが、最終的にはご協力いただけた家があったことに感謝している。

（6）こうした動向に対して、大規模豪農－中規模豪農は地主講を結成した（羽州村山郡谷地郷の場合は「泰平講」と称する）。「世直し状況」論では結成の理由を半プロレタリア（零細小作＝日雇雑業）層の運動を鎮圧するものと説明していた。しかし、上記のように、村山地方における幕末期の地主講は大規模借地農も参加し自小作層や半プロ層と連携した広域的な小作争議の展開していた。これに対して、豪農層が村を越えて広域的に結集し「均し毛見」に対抗して立附米の維持ないし引き下げ幅の地域統一をはかる組織としての本質をもって結成されたことを実証した。

（7）大規模豪農－中規模豪農は、慶応期の米価急騰を背景とした半プロレタリア層を中心とした世直し騒動に対峙することとなる一方、幕末・明治初年に幕府代官所及び山形県より取締役・穀類融通掛・農兵頭・強壮人頭取・勧農掛・地租改正掛などに順次任命され、政治権力と結びついて地域統合をめざしたが、その際に、地域社会の生産の実質的な推進及び組織主体となっていた大規模借地農をいかに位置づけていくかがキー・ポイントとなった。本来、大規模借地農は大規模豪農の小作支配人として地味のよい小作地を自らの小作地に選定できるなどの利得から大規模豪農との連携を志向する側面をもってはいたが、決定的だったのは幕末・明治初年における地域産業振興政策の形成・展開が大規模借地農を小作争議から分離させる効果をもったことである。大規模豪農－中小豪農は、幕府代官所や山形県に対して、紅花から生糸への転換をふまえた地域産業振興を提案する建言運動を順次展開し、自らも勧農掛などに就任することにより実践していった。

（7）大規模借地農もその経営において明治初年には養蚕業の比重を高める方向にあったので、大規模豪農らによる大量の桑の献苗・植樹、生糸生産奨励・品質管理・出荷及び金融支援などの活動とは利害が一致し、支持するものとなった。地域社会においては桑小屋の破壊などあらたな勧農策を攻撃する運動もみられたが、大勢としては大規模借地農など地域社会の生産の実質的な推進及び組織主体は地域産業振興策を支持しその基盤となり、そこに地域統合の一過程がみられることをあきらかにした。本研究における大規模借地農の発見によるあらたな基礎構造分析の成果と結びつけながら、明治初年の地域統合という政治過程を解釈・説明することを試みた。

（8）大規模豪農－中小豪農は、自由民権期には演説会を開催し村山郡の名望家間の交流を強め、また政治結社を結成し地域社会振興のための政治運動・経済活動の組織化をはかっていった。谷地郷の場合は「特振社」を結成し、まさに地域の特産物振興を核にした発展をめざした。一方においては大地主形成が進展し、地主小作関係における社会的矛盾も蓄積していくが、松方デフレ期にみられた負債返弁騒擾が羽州村山郡では大きな運動にはならなかったのは、この地域において商業的農業が発展し生産力（例えば稲作反収）も全国平均より高水準であり、大規模借地農を中心とする生産の実質的な推進及び組織主体が小作人諸層をまとめあげ、大地主形成下の地域統合の基盤となっていたことを要因として指摘できる。ただし、松方デフレ下における大地主の土地集積と階層分解自体は進展しており、地主小作関係における社会的矛盾は蓄積されていった。大正期以降の人権思想・社会主義思想などの地方伝播と地域における学習のひろまり（谷地郷では「谷地倶楽部」が学習の場となった）や、昭和恐慌による養蚕業の打撃と零細小作＝日雇雑業層における累積債務の急増は、村山地方を小田島事件・借金棒引き闘争をはじめとする急進的な小作争議の多発地帯へと展開させることとなる。この歴史過程には、長年形成された商業的農業に依存する地域農業の構造的矛盾が孕まれていると展望した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 岩田浩太郎、豪農論・地域社会論の視角、近世近代の地域社会と名望家、東洋大学井上円了記念助成共同研究報告書、査読有、第Ⅱ巻、2014、pp48-64

〔学会発表〕（計１件）

① 岩田浩太郎、豪農論・地域社会論の視角、東洋大学井上円了記念助成共同研究２０１３年度公開研究会、2013 年 12 月 7 日、東洋大学白山校舎

〔図書〕（計１件）

① 岩田浩太郎、村田町文化遺産活用地域活性化事業実行委員会発行、村田商人の歴史像―「蔵の町」をつくった人々―（平成２５年度文化庁文化遺産を活かした地域活性化事業パンフレット）、2014、8

６．研究組織

(1)研究代表者

岩田　浩太郎（IWATA, Kotaro）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：３０１８４８１１